

ケニア・ケータイ普及の歴史

羽瀨一代

はぶち いちよ / 弘前大学、AA 研共同研究員

世界中を席卷するモバイルメディア。2000年代は、アフリカや内陸アジアでの普及が顕著だったと言われている。ケニアでも2000年代がモバイルメディア草創期だった。ケータイの普及について、そのプロセスを確認してみたい。

ネットワークの拡大

1997年、ケニアで最初の携帯電話会社サファリコムが、テルコム・ケニアから独立し、設立された。日本でも同様であるが、ケータイを利用するためには、電話機器と

電話番号情報を識別する電子カード、つまりSIM (Subscriber Identity Module) カードが必要である。当初ナイロビで発売されたSIMカードは、10万8000シル（日本円にして15万円くらい）であった。また機器

は、約3万から6万シルであった。小学校教員の初任給が1万3000シルであったことを考えるととても高価な道具だったといえる。

ケータイが利用可能な地域は、ナイロビを起点に、インド洋岸のモンバサ、そしてビクトリア湖畔のキスム、内陸部のナクルなど、主要都市とそれらの都市同士をつなぐ幹線道路を中心に拡大していった。発売初期には、特別の電話番号が割り当てられており、0722510000番台は、ナイロビにおいて発売された番号であり、0722410000番台はモンバサで発売されたものである。当初、SIMカードが高価だったため、これらの番号のSIMカードをもつ人間は「お金持ち」ということになる。

その後SIMカードの価格も下がり、2000年にサファリコムは、英国のボーダフォン・グループの傘下となり、利用者は約2万人へと増加した。2014年現在では、普及率は7割を超えている。もちろん、スマートフォ

携帯電話をみせてくれるトゥルカナの若者たち(2007)。都市を離れて周縁地域に行くと、電話機器はどこか壊れている。

ネットワークが繋がったばかりのトゥルカナ湖畔・カラコル (2010)。



トゥルカナの田舎で国勢調査を受けるお父さん(2009)。調査項目に電話の有無はなかった。



ンの利用も珍しいものではない。

セルテル・ケニア（現エアテル）は、サファリコムがサービスを開始した1年後に商業都市モンバサからサービスをはじめている。サファリコムがすでにナイロビからサービスをはじめていたことがその理由だと思われる。セルテル広報宣伝の担当者は、モンバサがケニアでも有数の商業都市であることも理由だと説明している。セルテルでは、サファリコムとは利用者拡大戦略が少し異なっていた。セルテルは、当初、SIMカードと機器をセットで格安販売し、バックマージンを利用料金に含めるといった方法でケータイを販売していた。つまり、使用された電話料金のなかから機器代金を徴収するという方法である。2000年までSIMカードと機器のセットで8000シルという価格であり、その頃の通話料金が1分40シル程度だったという。この頃のセルテルのセールスポイントは次のようなものであった。アフリカの15の国々が1つのネットワークでつながっており、ケニア、ウガンダ、タンザニア、コンゴ（キンシャサ）、コンゴ（ブラザビル）、そしてガボンの6つの国の間では、国外にでも国内にいるのと同様に電源さえ入れれば使用できるとい

うものだった。

現在では、サファリコム、エアテル、オレンジ、Yuなどの複数の会社がしのぎを削っている。ケニアのケータイ利用者は、1人でいくつもの番号を保持している場合が少なからずある。異なる電話会社のSIMカードを入れ替えて、状況に応じて番号を柔軟に使い分け、それぞれ利用者が使いやすいようにしているのである。

周縁地域におけるネットワーク

1990年代後半から2000年代初期にかけて、インフラの整備が進み、主要都市においてケータイの利用は可能となった。その後、徐々に周縁地域にもサービスエリアは拡大していった。たとえば、エチオピア国境やスーダン国境の付近に位置するトゥルカナ・カクマの難民キャンプ周辺において、2002年にサファリコムに緊急用のサービスポイントを作るよう働きかけた、カクマのIT技術者であるマラキは語ってくれた。その後、2003年にサファリコムの電波塔が完成し、続いて2004年にセルテルの電波塔が完成したという。

また、観光地のマサイマラにおいて、次のような事例もあった。ナイロビのレスト

ランでマネージャーをしているジョンがケータイを初めて購入したのは、マサイマラの高級ロッジでバーテンダーをしていた時のことだった。ジョンは、高級ロッジに宿泊していたオーストラリア人と仲良くなった。そのオーストラリア人は中古車をジョンに買ってくれたうえに、ナクルでケータイも買ってくれたという。1998年のことだった。シーメンス製の3500シルの機器であり、サファリコムのSIMカードは当時2500シルだったそうだ。10万シル以上していたSIMカードが1年ほどで暴落し、がんばれば手に入れられる程度の価格になったのだ。

2004年までジョンが働いていたマサイマラの高級ロッジでは、2006年頃までネットワークが開通しておらず、ケータイの利用はマサイマラから約80キロメートル離れたナロックという街やナクル、ナイバシャといった都市に遊びにでかけたときのみであった。日常的にケータイが利用できるわけではないのに、彼は「新しい技術だし、新しいものを使ってみたかった」と誇らしげに語っている。

ケニア最北西端にある牧畜社会トゥルカナにおけるケータイ利用サービスの開始に



食事の準備 (2011)。

食事前に電話する (2011)。

ついで、「サファリコムにプレッシャーをかけた」という表現でいきさつをマラキは語っていた。都心部のお金持ちが使える道具としてのケータイをケニアの人々は、経済階層に分断されることなく、さらに周縁地域においても使えるよう望み、そしてその望みは少しずつ実現していったといえよう。現在でもネットワーク拡大の計画は着々と進んでいる。

ケニアのケータイ普及は2000年代の初期から現在にかけて急速に設備が整って、実現していったと考えられる。これは、固定電話の普及率が低率であり、通信に対する潜在的ニーズが高かったということ、固定電話と比較してインフラの整備が容易であること、それゆえに安いコストで利用できるといった事情が関連している。

通話シェアサービス (air-time sharing service) も普及に拍車をかけた要因のひとつである。これは、SIMカードに課金登録されている利用料金の一部もしくはすべての料金を他のSIMカードに移し替えるサービスである。ケニアで調査をしているとき、アシスタントや知人にケータイの利用料金を分けて欲しいと頼まれることがある。もし筆者が利用しているケータイ番号に携帯利用料金が前払いされていたならば、簡単に自身のケータイから他のケータイへと利用料金を分けることができるのだ。たとえば、500シル分の前払い料金が筆者のケータイに登録されていたとする。携帯電話会社にケータイメールで「300シルを0722*****番へ」という指示をだすことによって、筆者のケータイには200シル分の利用料金が残り、相手先では300シルの利用が可能となるのである。このサービスを利用することによって、現金の持ちあわせがなくともケータイを利用するための助け合いがおこなわれるならば、メールや通話が可能となる。通話シェアサービスが貧困層のケータイ利用を容易にした。

また2007年にサービスを開始したM-PESAでは、ケータイによる送金も可能となった。ケータイ間でのお金の送受も可能であるが、送金者がケータイを使用していれば、ケータイをもたない人に対しても送金可能であるという点が画期的であった。ケータイショップを送金先に指定し、受取者が名前、IDカードとそして合言葉をショップに伝えれば、お金を受け取ることができるのだ。

このように、急速なケータイのサービスの発展とともに利用者が増加していった。そして、ケニアはドラスティックな社会変



あちらこちらにみられるケータイの宣伝。



トゥルカナ・カクマのまちの食堂で電話 (2010)。

容を経験している。これまで、途上国におけるケータイの普及については、経済に関するサクセスストーリーが感動をもって伝えられることが多かった。もっとも有名なものでは、バングラデシュのグラミンフォンに関するレポートだろう (N. サリバン『グラミンフォンという奇跡:「つながり」から始まるグローバル経済の大転換」東方雅美・渡部典子訳、英治出版、2007年)。途上国ではない日本でもケータイ普及に関しては、経済成長の救世主として、ひいてはテクノナショナリズム (技術を日本の国家的アイデンティティとする思想) へと通じる物語が人口に膾炙した。しかし、メディア研究においてより重要なことは、メディアが社会のなかに埋め込まれ、日常的に利用される、その行動を詳細に捉えることである。そして、その新たな行動スタイルが定着することによって、人々の社会的態度や意識に影響を与え、社会関係を再編して

いく様態を分析していかななくてはならないだろう。

とくに、周縁地域に生きる人々は、電子メディア空間をどのように利用しているのだろうか。ケニアのメディア普及は、ケータイからはじまった。これを契機として、さらに、深化していくことは明白である。この初期段階において、人々のケータイ利用について記述しておくことは、メディア環境の変容と人々の生活や社会意識などどのように連関するのかという点を議論したり、モバイルメディアによるグローバルな情報環境の動態を議論したりするうえで重要なことだと思われる。そうしたことについては、これまでヨーロッパとアフリカ、北米と南米といったように、地理的にくられて説明され、格差が論じられてきた。現在では、情報化が進み、情報空間における格差や問題を捉え、新たな意味での周縁を意識した調査研究が求められている。